

## 【シンポジウム】

共催：全国保健所長会

### 新型コロナウイルスのパンデミックとの対峙

- 保健・医療の各セクターはどのように対応しているのか -

#### 【座長】

山本光昭 先生（社会保険診療報酬支払基金）

寺崎 仁 先生（東京女子医科大学）

#### 【シンポジスト】

成田空港検疫所における COVID-19 に対する水際対策について

田中一成 先生（厚生労働省 成田空港検疫所）

大都市部の保健所のコロナ対策～区内医療機関との連携を通じて～

松本加代 先生（港区みなと保健所）

新型コロナウイルス感染症への対応～大学病院の現場から～

石川元直 先生（東京女子医科大学東医療センター

・医療法人社団焰やまと診療所）

在宅患者を含めた地域医療における対応

英 裕雄 先生（医療法人社団 三育会・新宿ヒロクリニック）

## 〔企画の趣旨〕

中国・武漢で確認された新型コロナウイルスが、世界的に流行してから 2 年近くが経過しようとしている。ヨーロッパや北米・南米などでは、日本とは桁違いの莫大な数の感染者を生み出しながら、それに比例するようにこれもまた桁違いで多くの人が亡くなっている。アジアでもインドなどは流行が極めて深刻で、多くの犠牲者が出て社会全体が大きく混乱している。それに比べれば東アジアでの流行は、ギリギリのところまで何とか持ちこたえているようで、特に日本では、「緊急事態宣言」や「重点措置」を繰り返しながら、医療崩壊を防ぐのに躍起となっている。しかし、気を緩めれば一気に流行が拡大する瀬戸際にあり、社会活動や経済活動に大きな影響を及ぼしながら予断を許さない状況が続いている。

さて、他の国々の感染流行が伝えられる中で、今のところ日本はこの新型コロナウイルスのパンデミックに何とか対応しているように見えるが、「政府が有能だから」とは国民の多くは思っていないし、また「民度が高い」と一言で説明できるものでもなかろう。しかし、現場で対応している人々は、自分たちの役割を果たそうとして必死に頑張っており、よく言われることだが、日本人が「真面目である」ことや「仕事への向き合い方」など、良い意味での「国民性」がそうした状況を生み出す一つの要因なのかもしれない。

ところで、既に 1 年以上にわたって、わが国の社会全体の保健・医療のリソースを総動員してこのパンデミックと対峙しているが、重症者の治療だけではなく、感染予防を含めた新型コロナ感染症全体への対応力が、今まさに問われようとしているように思う。そのためにも、往々にして病院で重症者のケアにあたるスタッフの奮闘ぶりに国民の目は行きがちだが、病院以外の保健・医療の各セクターがどのようにこのパンデミックに対応しているのか、改めて全体像を俯瞰して見る必要があると考えている。例えば、感染症流入防止の瀬戸際対策である「検疫」に始まって、感染発覚時の積極的疫学調査や入院調整等は「保健所」が担っており、中症者や重症者の治療は主に「病院」が引き受けている。一方で、在宅療養患者への対応や地域医療の現場では、「診療所」が感染症対策の役割を果たすことが期待されており、保健と医療の各セクターそれぞれの対応力が十分に発揮されてこそ、日本の社会全体のコロナ対策が効果を上げると考えるべきであろう。

そこで今回のシンポジウムでは、「検疫所」「保健所」「病院」「診療所」の関係者が一堂に会して、それぞれがどのように今回のパンデミックに対応しているのか、互いの状況を共有する機会を設けてみることにした。それぞれのセクターがバラバラに対応していたのでは、本来ならばできることもできなくなるであろうし、連携が重要だとは言っても、お互いの状況を知らずに連携することなどはできない話だと思う。まずは、各セクターがどのような役割を担いながらそれを果たそうとしているのかを確認しつつ、今後のセクター間の連携のあり方、そしてこのパンデミックの収束に向けた道筋を考えてみたい。